作って学ぶ漢詩入門
―中学生を対象とした漢詩授業における意欲向上の試み―

教育デザインコース　国語領域
胡　亦楽

１．はじめに

漢詩は、日本の伝統文化の一つとして継続し発展してきたが、近年、漢詩教育は授業時間数の削減などを受け、厳しい状況に陥っている。その結果、日本文化と深く結びついてきた漢詩が、外国文学として生徒に認識されることがある。また、授業においては鑑賞を重視することが多いが、漢詩は元々鑑賞に特化した文学ジャンルではなく、自ら創作でき、誰でも楽しめるものでもあった。

そこで、生徒たちの漢詩への抵抗を解消し意欲を高めることを目的とし、グループで相談し合う実作活動を体験させることが意欲向上に役立つと考え、今回は、実作を核とした漢詩入門授業を行い、その前提となる基礎授業では日本における伝統を学ぶため、日本漢詩にも言及した。その経験を踏まえ、パワーポイントや作詩ツール（詩語カード）の工夫により、中学生たちでも短時間で楽しく漢詩を作りながら入門できる授業の提案を行いたい。

２．方法

横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校に在籍する二年生３クラス１３５名の漢詩初心者を対象に５０分×３回の授業を行い、授業後アンケートをとり生徒の意欲変化の分析を行った。

１校時目:「漢詩とは何か」と「名作春暁を読む」、「漢詩と日本」の三つの章段に分け、基礎知識の授業を行った。

２校時目：漢詩手引書と詩語カードに関して説明後、五人グループに分け七言絶句を作らせた。

３校時目：各グループ作った作品の発表後、教師によるまとめ、アンケートを行った。

３．結果及び考察

１校時目の基礎授業と比べて、２校時目の実作授業における意欲は上がり、難しいと感じた生徒の比率も下がるという結果を得た。

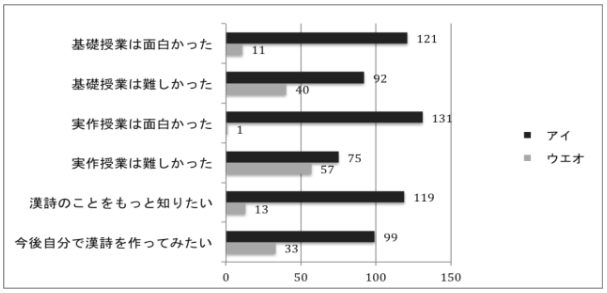


表１　授業評価項目別結果（五件法：　ア、そう思う　イ、ややそう思う　ウ、どちらとも言えない　エ、あまりそう思わない　オ、そう思わない）

基礎授業では９２％、実作授業では９９％の生徒が「面白かった」「楽しかった」と答えていた。記述欄からみると、意欲変化では、基礎授業が面白い理由は「日本語、日本文化および日本の有名人が作った漢詩が紹介され、漢詩と日本との深い関わりを理解ができたから興味が湧いた」とあって、漢詩を作るのが楽しく、意欲・興味が向上したと理由としては主に「詩語を選んで並べるだけで、リズムと韻などルール通りの詩を作れるので、簡単で娯楽性もある」との回答や「グループワークで交流しながら楽しめる」との回答が寄せられた。

イメージ変化では、一番多くかつ典型的な回答は「最初は、漢詩に対して、書き下し文の学習と同じような難しいイメージを強く持っていたが、詩語カードを利用すると、難しくなく詩を作ることができ、とてもイメージが変わった」との記述である。

４．終わりに

漢詩の学習においても、実作・発表という形での生徒たちの相互交流による主体的な学習活動を通じ、より意欲が引き出しやすくなると考えられる。伝統的に行われてきた学び方を改良・再現することで、現代の生徒にも漢詩本来の楽しさ、魅力を伝えられることを明らかにした。